

書評：ボルジギン・ブレンサイン編、赤坂恒明編集協力 『内モンゴルを知るための60章』

娜荷芽

明石書店の「エリア・スタディーズ」シリーズは、2016年まで139冊出版されている。その中の一冊である『内モンゴルを知るための60章』は、中国国内の一地域・内モンゴルを対象としたもので、主に国を単位として出版されてきた同シリーズの中では、数少ない書物になる。本書は、内モンゴルの近現代史の研究で知られるボルジギン・ブレンサイン（滋賀県立大学教授）による編著で、内モンゴルの現代社会と近現代史に関する内容に重点がおかれている。さらに各章の執筆者の専門は、主に歴史学であるものの、文化人類学、社会言語学や政治社会学まで含まれているため、本書の内容も多岐にわたるといえよう。次に、本書の内容紹介及び簡単な評を行う。

本書は以下の構成からなる。

はじめに（ボルジギン・ブレンサイン）

- I 内モンゴルとはなにか？
- II 現代内モンゴルの諸相
- III 現代内モンゴルの生活風景
- IV 内モンゴルと中国
- V 内モンゴルと近代日本
- VI 中国領モンゴル人の世界
- VII 内モンゴルとモンゴル国
- VIII 内モンゴルにおける多民族世界
- IX 戦後の内モンゴル

以上9部は、60章、そして7つのコラム、参考文献、3つの附表から構成されている。主要な内容は、「はじめに」に書かれているように、大きく「内モンゴルと中国」、「内モンゴルと近代日本」、「内モンゴルとモンゴル国」、「現代内モンゴルの諸相」である。ただし、地域としての内モンゴルというよりも、内モンゴルを中心とする中国のモン



ゴル民族（蒙古族）を主な対象として書かれている。

まず、周知のように日本では、内モンゴルに関する一般向け書籍が数多く刊行されている。しかし、それにもかかわらず、日本人の中には、中国国内のモンゴル民族はすでに漢化して、モンゴル文化がほとんど残っていないと誤解している人も少なくない。このような状況の中で、内モンゴルの現状と近現代史を中心とする歴史を少しでも広く、また、詳しく伝えようとする本書の目的は、ほぼ達せられたといえよう。特に本書の第 58 章では、1980 年代の学生運動について述べられているが、これは、おそらくはじめて日本語でまとまった形で紹介されたものであろう。

また、現在では、戦前、内モンゴル諸地域でモンゴル人と共に青春を過ごした日本人の多くの方々が高齢化し、鬼籍に入られた。それによって、忘却されたか、もしくは忘却されつつある、日本と内モンゴルのつながりが、本書によってかなり明確にされたといえよう。本書により、現代の内モンゴル社会のさまざまな面において、戦前からの連続性があることを我々は再認識することが可能となるだろう。

また、本書は、地域的に多様な事例分析を共著としてまとめた点において特徴があるといえよう。現場の内モンゴルより離れた日本で出版された書籍であるがゆえに、本書に通底しているのは、歴史的な側面を重視しつつも、ジャーナリズム的な観点から、内モンゴルの社会における問題点を明らかにしようとする姿勢である。本書において提起された諸問題は、現場にいる研究関係者には、痛いほど身をもって、現実のものとして認識されている。これらについては、まさにモンゴル人も内モンゴルの現地において訴え続けており、解決に向けて日々理性的な努力を重ねており、その一部は結果としても現れている。

例えば、中国国内のモンゴル民族の青少年が、高校までの歴史の授業で教えられるのは中国史と世界史であり、モンゴルについては元朝史の枠内で教えられるにとどまる。したがって、内モンゴルのモンゴル民族は、チンギス・ハーンやフビライ・ハーンは知っていても、グンサンノルブ、ハイサン、徳王については、大学までの義務教育では、一切知る機会がない。内モンゴルの大学に入り、ようやく内モンゴルの、特に近現代の歴史について知識を得ることができるようになる。たとえば、内モンゴル大学では、かつては、蒙古歴史学系（学部）を除き、モンゴル学学院において「蒙古史」の授業は選択科目であった。2016 年から、同学院では「蒙古史」の授業が選択科目から必修科目に格上げされた。さらに、内モンゴル大学では、全学レベルの「通識科目」授業として「近代蒙古史」が必修選択科目のひとつとして新たに採用された。なお、通識科目とは、その科目の中から一つの科目を選択して履修し、単位を取得しなければ、卒業することはできない科目を指す。毎年、理系の学生やモンゴル民族以外の学生をも含む 120 人（毎学期 60 人）を越える受講生が、この授業に履修登録して、歴史学研究成果に基づいた講義を受けることが可能となった。これは、内モンゴルの歴史を、少しでも多くの人に知ってもらおうと願う、現場で教育活動に携わる教員たちの尽力の成果である。また、公的にモンゴル語・モンゴル文字を使用することができる場を少しでも多くしようと、言語環境を改善するための努力をも怠っていない。

このように、モンゴル人は決して受動的な立場に留まっているわけではない。

さらに本書の分析内容も、現在の内モンゴルを知る上で必要不可欠な内容が多く、内モンゴルの実態を見出した点では高く評価できよう。本書のことばを借りれば、「共産党と国民党も再握手して和解した」（220 頁）今日、少数民族地域に対する新たな分析視点及び知見を掲示することに成功し、学術的に意義深い研究を示している点も、本書の特徴といえよう。

本書は、中国では主に日本語がわかる内モンゴルの研究者たちにある程度広く読まれている。各分野の研究者によって書かれた各章の多くは、一般向けでありながらも学術的な裏付けがあり、研究上の価値もある。また、文章以外にも地図や統計表なども便利であるため、極めて有益に使用することができ、現に、内モンゴルの大学における教育現場でも参考文献として活用されている。また、こちらの状況にあわせて取捨選択すれば、いままで深く踏み込めなかった諸課題への問題提起を促すことができるであろう。類書には見られない、独自の性格をもつ本書が、今後おおいに活用されることを期待したい。

知的刺激を受けるのみならず、さまざまな問題提起の一助となる本書を高く評価したうえで、最後に、若干の疑問点を指摘して、評者の責をはたしたい。本書は、旅行案内書ではないので、各地の観光名所ばかりを紹介する必要はないが、世界遺産に指定されているフビライ・ハーンの夏の都「上都」や、江上波夫によって発掘され、日本との関係も深いオロン・スム遺跡を始めとする歴史遺産、および、エズネー（エチナ）のトーロイ（胡楊林）、フルンボイルの大草原など、今は国家によって保全されている豊かな自然遺産その他について本書で触れられていないのは、観光資源に富んだ内モンゴルに住んでいる筆者には、やはり一言なりとも書いてほしいところであった。もっとも、限られた紙幅の中ですべてを満たすことは、もとより不可能である。本書は、「エリアスタディーズ・シリーズ」の中では、他の本よりページ数が多く、これ以上内容の充実を望むのは、酷と言うべきであろう。本「エリアスタディーズ」シリーズでは、「～を旅する**章」と題される書籍も含まれているので、本書では十分に触れられなかった内容については、『内モンゴルを旅する**章』等において取り上げられることを期待している。

次に、筆者の個人的な関心ではあるが、「内モンゴルと近代日本」の部において、20 世紀前半における内モンゴル出身の留学生たちの事績について十分にに取り上げられていなかったことも、もの足りないところであった。日本で学んだ彼らは、内モンゴルに近代的知見をもたらし、近代的社会を築き上げる礎石として、大きな役割を果たした。それゆえ日本と内モンゴルを結び付けた彼らの業績をできるだけ詳細に取り上げていただきたかった。しかしながら、「サイチンガー——タブーの詩人とその作品」、「仏教交流」及び「モンゴル人と建国大学」の章は「蒙疆政権」留学生の運命、僧侶の日本留学、「満洲国」領域内のモンゴル人の国内留学、および卒業生の足跡を考察するうえで貴重である。

本書に、「第一次満蒙独立運動」に基づく歴史分析も見られるが、中見立夫『満蒙

問題」の歴史的構図』(東京大学出版会、2013 年)において「満蒙独立運動」を否定する学術的見解が示されているので、この点についても注意を払う必要があるように思われる。また、細かい点ではあるが「芒芒的草原」(正確には茫茫的草原)、「凌昇」(正確には凌陞)のような誤字が散見される。

最後に、内モンゴルが中国の一部であることによって、結果的には、内モンゴル出身のモンゴル人が、国際的にさまざまな分野で、より広い活動の場を得ることができたという側面があることも指摘しなければなるまい。例えば、現在、日本で大学の教員として活躍している内モンゴル出身のモンゴル人研究者の大部分は、モンゴル語以外にも、中国語の授業を行いながら、自分たちの専門研究を推し進めることが可能となったのである。

以上、本書に若干の疑問を呈したが、各章で取り上げた諸テーマに対する詳細、かつ誠実に分析している点に対して敬意を表し、これらのテーマに関する今後の研究に大いに注目したいと考える。

ボルジギン・ブレンサイン編、赤坂恒明編集協力『内モンゴルを知るための 60 章 (エリア・スタディーズ 135)』明石書店、2015 年、424 頁。

(なひや：内蒙古大学蒙古歴史学系)